

司馬遷の『史記』に思う バートン・ワトソン

プロローグ

有名な中国の歴史家・司馬遷——彼は紀元前一四五年頃に生まれ、紀元前八九年頃に没しましたが——と言えはる人々は、彼が漢の武帝の不興をかい、宮刑の辱めを受け、その時代の慣例なら当然自殺すべきところを、敢えて、『史記』という中国の国民と国家の不滅の歴史を書き上げるために、その屈辱的な刑を甘んじて受ける道を選んだことを想い起こします。確かにこのような悲劇的なできごとは、彼の人生において衝撃的な転換をな

すものであり、そのような決断を下すには、大きな勇気と確信がいったにちがいありません。しかし本日は、歴史家としての司馬遷のもっと楽しい側面を取りあげ、『史記』の文体ならびにこの作品が司馬遷の時代から今日まで何世紀にもわたり中国人ならびに他の国の人々の間で賞賛されてきた事実について少々語りたいと思います。

一

第一級の歴史家を生み出すには多くの様々な特質が要求されます。まず、真に優れた歴史家になるためには、

過去に対する強烈な興味や感受性をもたねばなりません。また、必要な原資料の収集の仕方、その取捨選択の仕方、その価値と信憑性の評価の仕方、更に証拠物の断片をつなぎ合わせて、その人が取り組んでいる人物や出来事の一つの完ぺきな絵として組み上げていく方法を知っていないではなりません。しかし、たとえこれらすべての条件を満たしたとしても、もし、明快で、論理的で、芸術的にも優れた形でその研究成果を読者に提示するのに必要な文体をそなえていなければ、その作品は、本当に成功したものとはなり得ないでしょう。読むにたえない文体で書かれた歴史作品は、まさに「誰も読まない作品」となってしまうでしょう。

二

古来より中国では、司馬遷は歴史家としての賞賛すべき特質に加えて、壮麗な文章家であるというのが一致した意見となっています。司馬遷がいかにして並みはずれて優れた中国語の力をもつにいたったかについては、私達は推測するしかありません。彼が幼少の頃から儒教の

伝統である「五経」の徹底した教育を受けており、中国の哲学書や文学書を幅広く読んでいたことを私達は知っております。彼の父・司馬談は、武帝時代の宮廷における「太史公」（歴史担当官）でありましたが、司馬談の死後（紀元前一〇〇年）、司馬遷が父の職を継ぎ、武帝の国内旅行にしばしば随行し、占星学、易学、暦法に関する事柄について武帝に具申しました。司馬遷は国のための公式書類を作成することが多く、そのようにしてさまざまな文体でものを書く経験を積んだのは間違いないことでしょう。ある後世の批評家は、司馬遷は国内を旅して中国の広大な河や聳え立つ山を眺める機会を得たが故に、豪快で、気品あふれる、流麗な文章を書くことができたとしております。この最後の説は確かに面白いかもしれませんが、私にはやや空想的すぎると思います。私は観光を好み、他の人にもそれを勧めるのですが、このような経験が私の文体を良いものにする上で明確な効果をもたらしたと思ったことは一度もありません。私の経験では、文章力を向上させるのに役立つ唯一の方法は、優れた著者の作品を読むこと、そして何よりも、執筆と

いう実際の行動の中において、練習、練習さらにまた練習を重ねることです。

これに関連して私がここで申し上げておきたいのは、司馬遷の時代には、紙はまだ中国においておそらく発明されていなかったか、よしんば発明されていたとしても、ものを書くための材料として一般的に普及していなかった、ということなのです。通常、文字を書くには、竹や木の長くて薄い小片の上に、筆と黒い漆を使って書き付けられました。もし間違えた場合や一カ所ないし数カ所書き変えたい時は、ヘラで古い文字をこすり落として、語句を書き直したのです。今日の私達なら、書いたものを変更したり訂正したい場合は、そのページを簡単にタイプし直したり、ワープロならば、どこかのキーを押せば機械が私達の代わりに訂正してくれます。しかし、司馬遷の当時の人々にとって、ものを書くことは時間のかかる、煩わしいことで、そのため人々はおそらく書く作業に取りかかる前にまず心の中で美麗な文章を作り上げ、自分を訓練したのでしょう。たとえそうであっても、百三十章からなる『史記』のような龐大な作品の全文章

を書き上げ、整然とした順序で組むことができるように一つひとつの木片を束ねるのに要した時間と労力と思うと、驚愕せざるを得ません。

三

『史記』の百三十章は異なる節に分けられており、統治者の公けの振る舞いを扱ったものもあれば、当時の優れた政治家や思想家の伝記を紹介したものもあり、さらに、経済、地理、音楽、儀式、事件年表のような、特定の対象についての論文の性格をもつものもあります。これらの歴史の様々な節において、司馬遷は多種多様な文体を用いています。時に彼の文体は冷然として、事実を述べるにとどまっております、歴史の発展の経過における段階を単に示すのみで、著者の側からの個人的なコメントや感情的なかわり合いを用心深く排除している箇所もあります。また時には、各章に対する導入文のいくつかに見られるように、類似したものとの比較、歴史的暗喩、修辭上の工夫を多用した、甚だしく華麗な文体を用いている所もあります。さらに他の部分、とりわけ多くの章

の締めくくりとなっている、個人的な評価においては、彼の文章は形式ばらず、うちとけた調子になっているものもあり、もしくはなんらかの行動や人物への怒りの糾弾を行ったり、また過去の悲劇への嘆息をこめながら、語っております。

『史記』の最も特筆すべき性格は、その会話の文章の多くに見られる、きわめて写実的な語調にあります。司馬遷は、その著書の中で、大変多くの直接話法を用いています。それが特に多いのは、「列伝」の章です。直接話法を用いたこれらの文章のいくつかは形式的な演説で、雄弁かつ、慎重に均衡を図った文体で表現されております。しかし、他の多くは、形式ばらない対話か、もしくは短い発言で、これらはきわだった迫真性と現実味を伝えています。漢の時代の話し言葉がどんなものであったかを特定するすべがないわけですから、当然それらが本場に正確な当時の話の記録となっているかどうかはわかりません。しかし、後世の多くの著述家は、司馬遷がそのような文章の中で成し遂げた、きわめて生き生きとした迫真性あふれる文章の特質に注目しています。例

えば、精神的緊張の時に、どもってしまう宮廷官僚を描いているところでは、司馬遷はその男の話を描写し復元する際、そのどもりを再生するのに苦心したことがしばしば指摘されてきました。

司馬遷の『史記』はおそらく、直接話法の文章でその時代の実際のことばを再生しようと試みた、最後の古代中国文学の一つでした。『史記』の次の時代の大歴史家・班固（A. D. 三二―九二、『漢書』或いは『前漢書』の著者）は、初期の漢についての『史記』の資料の多くを受け継ぎ、改編しました。しかし、彼はそれを行った時、『史記』の文章の多くを書き換え、生き生きとした会話を表現していた接頭・接尾辞等の小辞を切り捨て、その代わりに、明らかに話し言葉から離れた圧縮と効率性の特徴とする文体作りに専心しました。この引き締まった「文語的」文体が、その後の中国の歴史書の典型的な文章となりました。そのため『史記』に代表される、くつろいだ、幾分言葉数の多い、そしてその時代の実際の話し言葉の雰囲気をもった文体は、その後殆ど完全に中国の歴史書から姿を消してしまっています。

司馬遷が資料を編集・脚色した時に、読者の関心を心に想い描き、作品をできるだけ読み易くすることに心を砕いていたことは明らかです。そのことの一つの証拠は、彼が、古体や難しい文体で書かれた『尚書』或いは『左伝』の様な初期の作品から引用する時に、彼の時代の読者に理解しやすいように、原文の言葉使いや文章構成を少し変えているという事実です。彼は、中国の伝統の中で神聖な書として崇められていた作品の文章を妄りに変更したとして、後世の批評家たちから激しく批判されました。しかし、実際には『左伝』のような作品のいくつかは、司馬遷の時代には儒教の聖典の一部であるとは認定されていませんでした。そして少なくとも、司馬遷の意図は明らかに、単に古代学の専門家に向けて書くことではなく、できるだけ多くの読者が読めるようにすることでした。それゆえ、彼は、より容易に理解できるように、極めて初期の時代に関連する資料の一部を修正する必要があると感じたのです。

また、『史記』のいくつかの部分、例えば紀元前四〇三年から紀元前二二一年まで続いた戦国時代に関連する章では、彼は、言葉上は特に難しくないが、虚構の要素を多く含んだ原典資料を引用しなければなりませんでした。『戦国策』と呼ばれる作品から彼が採用したこの資料は、歴史物語の形態をとっていますが、実際には、説得力ある話し方の技巧を教授したり、示すことを意図して書かれたものであります。ある人は、何故、司馬遷がその歴史書の中で、そのような疑わしい性質の資料を使用したのでしょうかと疑問をもちます。しかしながら、秦の始皇帝は、あの悪名高い焚書坑儒において、故意に秦以外の戦国時代の封建国家の全ての歴史的記録を破壊しました。その結果、司馬遷は、この時代の記述の編纂に当たって、他に引用する原典がほとんどありませんでした。もし、彼が、その不統一性と、虚構的要素の故に、『戦国策』の中の資料を拒否すれば、その時代の人々や出来事を描写することはほとんど出来なかったでしょう。しかし、『戦国策』からの物語を活用することによって彼は、真実の歴史というよりも歴史的な虚構

に近いかもしれませんが、文学的用語において極めて効果的で、彼の歴史書全体の中でも最も永く記憶される章を作り上げることができたのです。

司馬遷は、彼の歴史書の他の部分において、歌や詩の一節を引用して彼の物語を活気づけたり、要点をきわ立てたりしており、宮廷詩人・司馬相如のように文人の伝記の中では、彼はそれらの文人の作品から多くの部分を抜粋し、引用しています。あきらかに彼は、過去の人物や出来事について語る際、最大限可能な多様なものを借りて、それらをできるだけ面白く、そして人の心を動かさずにはいられないものにしようと考えたのであります。

中国の初期の時代における、司馬遷やその同時代人がいただいていた歴史や歴史書に対する考えを考慮すれば、これは驚くべきことではないのです。古代より中国人は、過去に対し並々ならぬ尊敬と崇拝を示してきました。これは彼らの先祖崇拜への強い傾向を鑑みした場合、恐らく

自然な事でしょう。彼らは、人類の黄金時代また一連の黄金期は、舜、禹あるいは更に古く、不明確な黄帝等の古代の伝統的賢者が支配した時代にもたらされた、と考え、また、その時、すでに人生を統治すべき道徳と哲学的原則は発見され明確になっていたと信じていました。したがって、それ以後の時代の人々に残された仕事は、過去を学ぶことであり、「道」という言葉に要約されるこれらの原則を理解することであり、それらが適切に後継の人々へと受け継がれていることを見届けることでした。

この理由により、古代の社会像を保持する『詩経』や『書経』のような経典は、最も重要な地位を占め、古典の地位にまで高められました。より困難で混沌とした時代を記述した『春秋』やその解説書のような後の歴史作品は、それらが古代の正しい道から乖離した結果生じた誤りや混乱を示しているがゆえに重要視されました。中国の作家達や、日蓮大聖人のような中国の影響を受けた他の国々の作家によって、度々引用される比喩を借りるならば、「歴史は鏡であり、そこに人々は過去の

教訓を学ぶことができ、過去の時代の善悪両面を観察することができるのであり、したがって、それによって自身の行動を修正する術を学ぶことができる」のです。

六

これまで、私は歴史家・司馬遷について語り、もし彼が中国の歴史を不器用でだらしない文章で書いていたならば、おそらく専門家以外は誰も読まなかっただろうという点を明示してきました。つまり、彼が流暢で生き生きとした文章で書いたため、彼の歴史書は最も影響力がありまた古代中国文学で広く読まれる作品となったのです。しかし、この種の観察は決して司馬遷の作品にのみ限られたものではありません。それらが具体化した理念や感情のためばかりでなく、それらの書かれた文体の力強さと魅力ゆえに、世界の他の文化圏で書かれた重要で影響力のある作品が、時代を超えて、広く読者を魅了し、その後も何世紀にもわたって読みつがれている例が何と多くあることでしょう。

私がコロンビア大学で教鞭をとっていた期間、クラス

討論においてははっきりと流暢に自分の考えを述べていた学生が、筆記試験や学期末レポートとなると、しっかりと満足に英語を書くことができないため成績が芳しくない場合がよくあり、私はしばしば驚かされました。彼らは大学に入学する前に英作文の適切な訓練を受けていなかったか、または、もともと考えられることは、彼らはこれまで英語の文体に十分な注意を払ったことがなく、文章を上手に書くための十分な訓練をしたことがなかったのでしょうか。なぜなら、先に申し上げたとおり、よい文章を書く力を身につけるということは、私の考えでは、とりわけ入念な練習を要することなのですから。

ちなみに、授業ではそんなに多くは発言しないのに、素晴らしい英語を書く能力があることがわかった他の学生がいて、私は喜んで彼らの書いた答案やレポートを基に彼らに高い点数をあげたことがあったこともつけ加えておきます。明確に、これらの学生は英語の文体という問題に注意を払い、明快かつ効果的に書く方法を苦心して学んだ学生なのです。

私が香港に滞在していたここ数カ月の間、カズオ・イ

シグロという若い作家が著した二冊の小説を読みました。おそらく皆さんも御承知かと思いますが、彼は生まれは日本ですが、十代の初め頃英国に渡りました。彼にとって英語は第二外国語、若しくは後天的な言語であるため、明らかに彼はその美しくかつ効果的な書き方を学ぶのに、大変な苦勞を強いられました。私が読んだ二冊の小説のうちの二冊『浮世の画家』は、日本で出版され、もう一冊の『残りの日々』は英国で出版されました。しかし二冊とも英文で著され、その英語は、私が思うに、一流の小説家や現在英語で執筆している作家に匹敵する程十分すぐれたものです。イシグロ氏が今後数年間でどのように小説家として成長を遂げていくのかは勿論わかりません。しかし、彼は既に最高レベルの英語の文体を具えています。言い換えれば、彼は、一流作家になるために必要なもつとも重要な道具を既に所有しているのです。

もちろん、今日ここにお集まりの皆さんがイシグロ氏のような英語を書く努力を始めなければならないと申しているわけではありません。私は、皆さんが日本語、ま

たは何語であれ、母国語で書くことに特別な関心を払うようお勧めしたいのです。英語で書くべきか、もしくは日本語か、中国語なのか、あるいは他の何語であろうがそれは重要ではありません。大切なのは、なんらかの言語を用いて自分の考えを、明快で興味深く、読む者に感銘を与えるように表現できるべきである、ということなのです。たとえ文章を書くことが重要となる職業や仕事に進むつもりでなくても、また家族や友達に手紙を書くことぐらいしか機会がなかったとしても、皆さんは良い文章が日常生活において実に望ましいものであることはいつもお気づきになっていらっしゃるでしょう。

エピローグ

良い文章の重要性を強調するのに熱心のあまり、司馬遷というテーマからかなりそれてしまったようです。しかし、秦朝の歴史に関係する『史記』のうちの十二の章の英訳の準備のため香港で多忙な六カ月を過ごした折、あるひとつの考えが何度も私の脳裏に浮かびました。司馬遷は、歴史書を編纂するに際して、中国の過去

に関する驚くほど豊富な事実や資料をまとめ上げましたが、もし彼がその材料を組み上げ、表現する技術を有していなかったならば、今日の人々はほとんど誰も彼の著書を読もうとはしなかったのではないか、という考えです。彼がその技術を所有していたがゆえに、また一方で色彩、風刺、劇的効果に富んだ物語を作り上げる術を知っていたがゆえに、彼は過去の男女の声を吹き込むことができたのです。彼がこれらの声をあまりにも見事に把握して再現しているので、中国語ばかりでなく、『史記』が翻訳された他の多くの言語においても、今日それらは生きており、また必ずや今後何世紀にもわたって生き続けるであろうと思います。

（バートン・ワトソン、コロンビア大学教授）

（本稿はバートン・ワトソン氏が一九九〇年七月一日に東洋哲学研究所で行った創価大学名誉博士号授与記念講演の原稿に加筆したものである）